

## 3 年生

科目名 (科目責任者)	授 業 概 要
看護のマネージメント (吉田 礼子)	看護ケアのマネージメントと、組織（サービス）のマネージメントの両面についての理解を深めるとともに、チームの一員として、看護実践の場において個人としてのマネージメントを積極的に行い、自己を生かし組織とその目的に貢献できることをめざしている。授業評価はおおむね良好だが、グループワークの集中度が十分とは言えなかったため、チームワークに必要なコミュニケーションに関する演習等の効果的方法を検討する必要がある。
災害看護と国際看護活動 (淵田 明子)	災害直後からの支援を含め災害時における看護について学習すると共に、発展途上国での看護活動、共通課題に対する国際的取り組み、災害時の国際協力など看護の国際活動についての認識を深め、グローバル化された世界における看護活動の未来について考える。授業評価からも社会的視野が広がったと捉えている。今後は、災害時における専門職として社会的に期待されている役割の認識を高められるようにすることが課題である。
成人看護学実習 (丹澤 洋子)	<p>看護の対象としての成人を理解し、その対象に応じた看護実践を通して成人看護の特徴を学習することを目的とする。</p> <p>中核目標①各健康レベルにある成人の特徴を理解し、その対象が直面する健康問題およびその解決に向けた看護の特徴を理解する。②対象に応じた看護が展開できる。③医療チームにおける看護の機能を理解し、自己の役割を認識し行動できる。④対象への看護を通して、自己の看護観を養う。</p> <p>実習評価の問題発見・解決能力と自己の看護観の項目において、「達成できた」と評価した割合が増加した。これは本実習の目標に含まれており、目標達成への効果的な学習が実施されたと考える。高度救命救急センター、手術室、ICU、透析室、ホスピスの各実習において、効果的な学びとなるよう実習前と実習後の方法論を再検討する。</p>
老年看護学実習 (鈴木 陽子)	<p>老年期にある対象の理解と自立した生活を支援するための看護の役割を理解する。介護老人福祉施設実習では介護老人福祉施設における高齢者の特徴と高齢者を支援する職種間の協働・連携について理解する。病院実習では、疾病を持ち治療過程にある高齢者の特徴と療養状況に応じた看護の実際から、看護の役割を理解するとともにソーシャルサポートシステムを理解する。また、高齢者の生活の場を通して、QOL を高める援助を実践する。</p> <p>介護老人福祉施設実習では老人福祉法や介護保険法の理解が課題であり、事前学習を強化するとともに施設オリエンテーション実施後のレポート作成の課題を加える。また、病院実習においては高齢者のフィジカルアセスメントの事前演習と、実習中の高齢者のソーシャルサポートシステムの理解のための学習支援を強化する。</p>
小児看護学実習 (淵田 明子)	小児の健康問題を総合的に判断し、健全な育成をめざして小児及び家族に対して個別的な看護が実践できる基礎的能力を養う。①健康を障害された小児の入院生活場面から、病気及び入院が成長・発達に及ぼす影響を考える。②疾病の経過に沿って必要な援助を考え実践できる。③母子相互のニーズを把握し、家族参加の必要性を認識する。④小児保健医療チームにおける看護職の役割と責任を理解し、協力できる能力を身につけることを学習する。臨床指導者と連携しながら学生個々の学習状況にあわせて目標達成できるよう

	に心がけた。今後は疾病の経過に沿った援助ができるよう指導を強化していく。
母性看護学実習 (望月 好子)	「周産期の対象理解、看護過程の展開、母性看護に必要な知識・技術・態度の学習、生命の尊厳や母性について自己の考えを深める」ことを目標に、付属病院周産期センターにて2週間(2単位)の実習を実施した。実習の事前学習として、「課題レポート」および「周産期の特性と看護に関する必修事項のまとめノート作成」を提示し、例年通り実習初日に発表会を実施し、実習へのモチベーションを高められた。病棟、MFCIU、外来、NICU等で多くの対象に接し、周産期の特性と看護への理解を深め、生命倫理観・看護観・人間観を深めることができた。次年度も同様に進めていく。
精神看護学実習 (吉野 由美子)	精神保健上の問題を抱える対象が、その人らしくその問題解決ができるように関わりながら精神看護の機能について学ぶ。対象理解を深められるよう意図的な患者選定と指導の強化により、明確な看護の方向性をもち実践し、対象の健康状態の好転を実感し、精神看護を理解することができた。レクリエーションの企画・運営を学習計画から削除したが、看護の必要性から自然に看護ケアとして計画・実施できた。社会の動向を踏まえ地域生活を支える看護のあり方について考えられるよう、デイケアや就労支援B型事業所の実習の学びを充実させることが課題である。
在宅看護実習 (中田 芳子)	在宅療養者とその家族の多様性と個別性を理解し、看護の役割と他職種との連携について学習する。また、外来看護の役割と特徴を理解し、施設内看護と在宅看護の連携と協働の必要性及び看護の役割を理解することを実習目的としている。 今年度は、学生数が98名となったので訪問看護ステーションは3施設新規にお願いし実施したが、どの施設でも問題なく多くの学びを得て実習は終了した。 次年度は、3～4日間の訪問看護実習がさらに充実するよう「自己紹介カード」の活用を促していく。
統合実習 (吉田 礼子)	実習目的は「看護チームの活動に参加し看護実践能力を高めるとともに、これまで学んできたことを統合して看護の本質を考え、看護活動に活かすことができる」であり、とくに看護ケアのマネジメントについて学ぶこと、チームとの連携を考慮して看護を計画・実践すること、学んできたことを統合して看護の本質について考え看護活動に活かすことを重視し、看護チームの活動に参加しながら受け持ち患者の看護の展開を求めた。受け持ち患者看護とチームの看護活動との調整に難しさを感じる声はあるが、看護観やチームの大切さを感じまとめにふさわしい実習であったという声もあり、授業評価としてもおおむね良好であった。目的・目標の理解と行動計画への助言をさらに充実させることが必要である。